

「富山県子育て支援・少子化対策県民会議」(H26.10.9開催)での主な意見

＜ライフプラン教育＞

・小さい頃から、結婚、出産、子育ての楽しみを伝えていくことが大事だと思う。親や地域の大人がいいモデルとなって伝えていくことで、希望をもって出産、子育てに携わることになるのではないかと思う。

＜結婚支援＞

・とやまマリッジサポートセンターに登録される方や、合コンに行く方はいいが、そういう場に行かない方も多いと聞いており、そのような方への支援も必要ではないか。

＜妊娠・出産等＞

・日本の特徴として、25～29歳で出産される方が極端に減り、反対に35歳以上で出産される方がかなり増えていることが挙げられる。富山県でもかなり高齢になってから出産されている方が非常に多く、リスクや負担が大きくなる。

・何歳でも産めるという感覚ではなく、安全に出産できる年齢で産んでいただくのがいいと思う。若いうちに産んでいただくためには、育児支援を手厚くすることや、早い時期から出産についての教育も必要。

・一人目を産んでお産が苦しかったり、産前産後がつらい、そして育児が大変で、喜びが見出せないと2人目、3人目が続かない。

・産科医の不足だと思うが、出産できる場所が少なくなっている。

＜子育て環境の充実等＞

・放課後児童クラブや放課後子ども教室をますます充実してほしい。

・若い人たちが、放課後児童クラブ等への就職を考えても、学童は14時～18時ごろまでの勤務であり、生活をしていけるような賃金がもらえないと聞く。子育てをする方だけでなく、子育てに関わる人たちのことも考えていかなければならないと思う。

＜男性の育児休業取得・育児参画等＞

・男性の育児休業取得率が非常に低いので、これをより高めて、男女ともに働きながら子育てできるような環境づくりが重要。

・育児休業を取りたいと思っている男性はかなり多く、企業のトップの方も男性の育児休業取得の促進に非常に前向きな見識を持っているが、直属の上司や同僚の間で、ケースがないが故に取得が難しいという状況が起こっている。

・育児休業の取得も数値目標を決め、県職員が率先して取得する等、具体的な方法がないと、なかなか男性が育児で休みますという機運にはならないと思う。

・子どもを増やし、なおかつ女性がいきいきと働くためには、イクメン・カジダンという言葉がなくなるくらい、男性と女性が共に育児を楽しんでいくという機運を作っていくことが重要。

＜貧困家庭への支援＞

・日本では、貧困家庭が多くなってきており、その一番弱者が子供である。生活困窮者に対し、市町村単位で、ワンストップで支援ができるよう、取り組んでほしい。